
ワークショップ 2

治療抵抗性泌尿器癌における遺伝子解析と治療

司 会	酒 井 英 樹 (長 崎 大)
	雑 賀 隆 史 (愛 媛 大)
演 者	富 田 秀 太 (岡 山 大)
	寺 田 直 樹 (宮 崎 大)
	宮 田 康 好 (長 崎 大)
	塩 田 真 己 (九 州 大)
	菊 川 忠 彦 (愛 媛 大)

司会のことば

大規模試験に基づいた evidence based medicine による標準治療は統計学による最善手の選択であるが、Precision Medicine は個人レベルでの遺伝子解析から最適な治療を考える、いわゆるオーダーメイドの個別化治療であることから、泌尿器科癌の標準治療に抵抗性となった症例においても治療法を見つける期待が持たれている。がん遺伝子パネル検査が2019年6月より保険診療で実施可能となり、同年10月からは遺伝子パネル検査による遺伝子プロファイリングに基づく複数の分子標的治療に関する患者申出療養が開始になり、本邦でも Precision Medicine が拡がりつつある。

本ワークショップではこのような遺伝子解析をベースとした“がんゲノム医療”の現状と泌尿器科癌における取り組みと展望について、以下のエキスパート諸氏から紹介と解説がおこなわれ、議論と理解が深められた。

まず岡山大学ゲノム医療総合推進センターの富田先生からゲノム医療の現状と課題に関する総論的な内容としてがんゲノム医療の提供体制、パネル検査の選択状況、岡山大学病院におけるがんゲノム医療外来の実施体制とその流れからエキスパートパネルの効率的な実施への取り組みが紹介された。

つぎに宮崎大学の寺田先生から patient-derived xenograft (PDX) モデルを用いることで治療効果と移植組織における遺伝子解析から得られた治療抵抗性獲得機序の解明と克服に関する研究成果と現時点での課題が紹介された。臨床における癌の性質の再現が可能であり、治療効果の評価と共に遺伝子解析が可能な PDX モデルの応用と将来への展望について議論された。

つぎに長崎大学の宮田先生に長崎大学病院での foundation one (F1) による実臨床でのゲノム診断の運用経験から、F1 ゲノム診断の現状と課題が報告された。そのうえで現在の保険請求システムを踏まえた課題解決としての今後の取り組みと展望について議論された。

さらに九州大学の塩田先生からも九州大学でのゲノムプロファイリング検査とその結果による治療提供の実経験が提示され、治療機会の拡大への課題からその改善点について提案があった。また、血液循環腫瘍細胞 DNA (ctDNA) の応用として foundation one liquid (F1L) の解析結果が示された。

最後に愛媛大学の菊川先生から Precision Medicine における新規候補遺伝子として前立腺癌における変異遺伝子としての SPOP について紹介され、Precision Medicine につながる持続的な基盤研究の重要性が確認された。